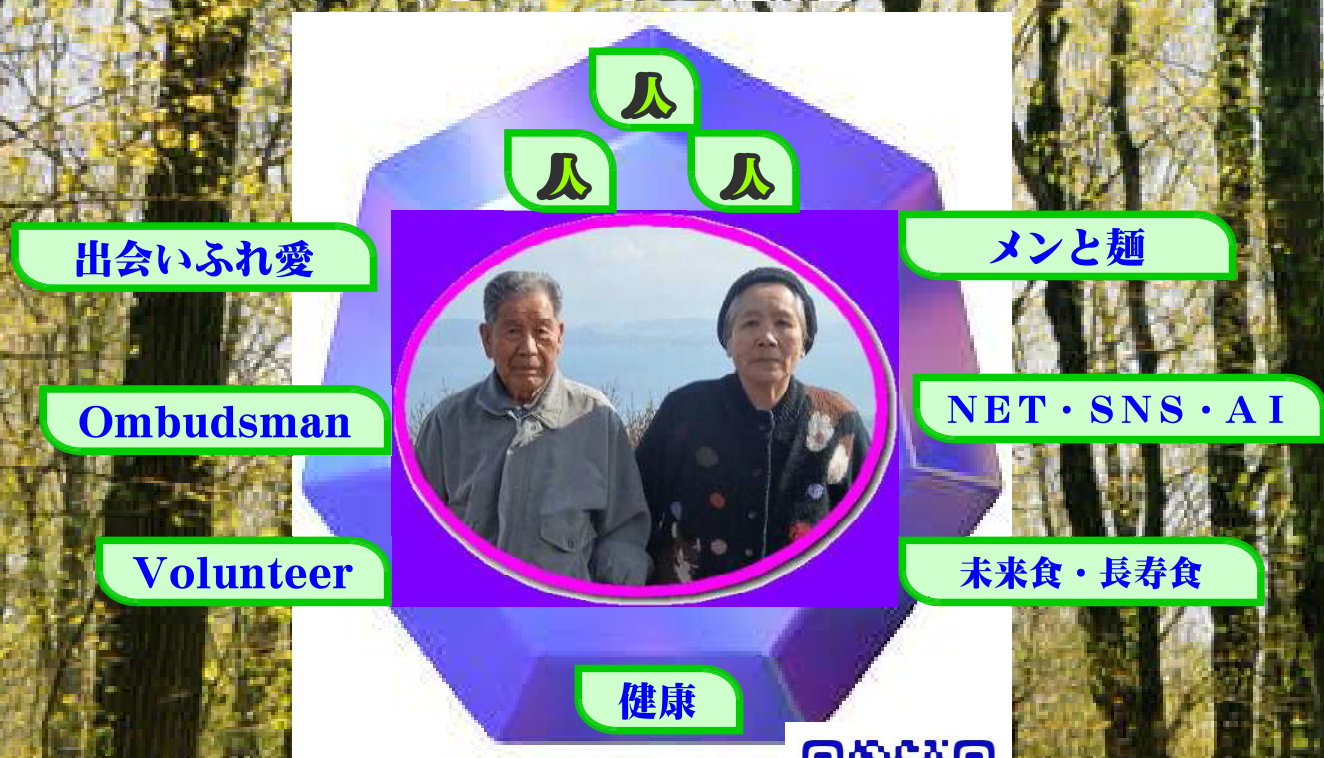


人生の道草

人生を支え、豊かにしてくれた
すべてに感謝



本冊子ネ
ットで見
れますよ

インカ帝国時代の
首都クスコの夕暮れ
家路を急ぐ農婦

長崎県南島原市長寿村

語り人 木村粋子：記録執筆編集 木村優仁

発行日：令和5年8月20日

人生をより楽しいものに、さまざまな出会い



人生の道草かも・寄り道かも
次の世代へと・のぞみ・かなえ・たまえ
女性が生き・活き・粋(いき)と果たした役割



島原手延そうめん製造⇒ 村おこし(長寿食)⇒ パソコン・Net・SNS⇒ 技おこし(未来食・機能食・特殊麺・即席メン)⇒ Volunteer⇒ まちおこし(まち巡り)⇒ Ombudsman

★縁先(縁側)に腰掛けて日なたぼっこしながら話してくれた母★

祖父と祖母をはじめ自分の生い立ちと地域との関わり、そして常に祖先の息づかいが直に伝わる逸話を機会ごとに私に、そして、祖先が島原天草一揆(原城の乱)での移住であることを胸に刻み、代々原城を守ってきたことも話してくれました。



1. 木村ス井コ(母:ペンネームは、粋子)

まず、いちばん支えてくれた母のことからお話しします。母の生家の豊増家は、1637(寛永14)年に勃発した島原・天草一揆後の1642年の幕府の移住命令により佐賀の鍋島藩の豪族であった豊増市衛門が南有馬に移住してきたのが初代である。水飢饉が続く中、地域の住民が安心して稲作ができるよう自費で曲堤(かねんとつつみ)作ったので「てぼじいさん」と呼ばれていたそうです。

大正14年生まれの母は、尋常小学校から高等女学校(高等小学校2学年を経ず)に86年前に飛び入学している。どうして周りの人たちが2歳上なのか疑問に思っていたそうです。男性は学業が優秀で経済的に余裕がある家庭の男子は、旧制中学を受験していた。(写真は92歳:新聞取材時)

南有馬尋常小学校の1年生から、一度も父親(豊増宮市)は、成績表を見てくれないので、「おとうさん何故見ないのですか。」と聞くと「私の子なら見ないでわかっている。」との返事で一度も見なかった。両親が「ス井コは、特別に成績がいいので、上の学校にやりましょう。」とお母さんがお父さんに言っていることを聞いたらしい。だが、女学校3年生の時に母がなくなったので、住み込みや通いの使用人がいるので、母親のかわりをしなければならなくなった。

授業の終わり次第、部活に興じる生徒を横目で見ながら汽車に飛び乗った。祖母が生きていたら最終学校まで進学して別の人生を歩いていたことでしょう。祖母が怒ったことがあった。校長が、松平賞は首席である娘(ス井コ)さんですが、校長の子どもさんにやることにしたと、言い訳を言いに来たときです。

女学校の同窓生は、教員や銀行などで働いているので、「おとうさん、私もみんなのように外に出て一度働いてみたい。」と言うと、父(祖父)は外に出したくないので、「養鶏の収入を全部やるから。」とはぐらかされた。相当の数を飼育しており玉子や鶏肉やヒナ(玉子をたどんで温めて孵化)を業者に販売していた。突然、お金持ちに成ったので、勉学欲の強い母はますます募ってきます。ヒナの雌を大村孵卵場より仕入れていたが、一匹も雄は混ざっていなかった。「お兄さんの家(島原)に泊まりで、遊びに行っていていいね。」と言って、お金はあるので、お米を2合持ってこっそり出かけます。大村の国立高等看護学院を受験している。食事は、コッペパンと具もない薄い味噌汁、病院の2階が宿泊で窓から看護婦さんたちがバレーボールをしているのを眺めていた。同室は舞鶴から来た人で入学式で会いましょうと約束して別れた。長崎市内の短大の英文科、他にいくつかを受験しているらしい。全てに合格したが反対された。

さらに情報が飛び込んできた。1949年(昭和24年)5月に、日本で2番目の国立女子大である奈良女子大学が開校し募集が始まることを知って受験準備していたことを祖父は全て知っていた。あきらめられないのは、母の青春は戦争ばかりだったことによるのだろう。

今まで、台北大学を出ての商船マンや教員など多くの縁談があったが、何らかの理由を付けて祖父がことわっている。だが、母は、既に24歳に成っていたので、これ以上手元に置けないし、試験ばかり受けるので、親族会議を開いて決めたいと親族を集めた。本家の当主が言うことに反論できる者がいないはずと母は事前に知っていた。幾つか縁談が持ち込まれており、役場に勤務する木村さんの方に祖父は決めた。母は、大学出の人を希望したが叶わなかった。これは有家町にあった**まぼろしの第七高等小学校**に通い、南有馬村役場にも自分が勤めていた縁を感じたのではないのでしょうか。役場のことは、仲人の偽りであった。**人生は、選択と決断の繰り返しの日々です**。母は**新切小学校の教員**などの話が村長より持ち込まれたが、義母と義母姉が猛反対し、父も**簡易郵便局、自動車教習所教官**の話もあったが、全て断っている。

尋常小学校で授業を受けているとき、雨が降ると、廊下で「おじょうさん、おじょうさん、傘を持ってきたよ。何処に置いたらよかとですか。」と大声で叫ぶ。恥ずかしいので、黙っていると、さらに大きな声で叫び続けるので、先生が指示されたそうです。昼の弁当を隠して食べるこどもが多かったので、麦飯を持ってくるように言われ、食べる前にチェックされた。祖母が、かわいそうと思って白米の上に薄く麦を乗せて持たせてくれた。おかずは、味噌が漬物が多い時代に玉子焼きは必ず入っていた。「**お父さん、夕食は何もおかずがないよ**」と言うと、「玉子があるだろう」との返事だった。飼育していた鳥の種類は、白色レグホンで、強健で体に比べて首や足が長く早熟で産卵能力が優れていると母は詳しく説明した。私が赤玉を好むと、赤も白も栄養価は同じと、よく叱られました。

母は、小学校低学年の頃に祖父に「郵便局に行って為替を組んできて。」とだけ言われて、為替を組んでとは、腕を組んでなら分かるかと、ドキドキしながら行った。郵便局で「**為替を組んでください**。」と言って渡したら、心配をよそに無事にすんだこと。半年の定期を買いに行くと9円だった。祖母は、何度も落としていないかどうか尋ねたらしいです。9円は当時は高額だったなのでしょう。母は、126代の歴代の天皇名や世界各国の産物や国の特徴や中国史（三国志など）を学校時代に覚え、忘れていないと、時折語んじてみせた。

国際オンブズマン世界会議とスウェーデン議会主催で、カール16世グスタフ国王とシルヴィア王妃ご臨席のもとオンブズマン制度創設200周年記念式典に参加するためにフィンランドの空港より電話かけて「今からスウェーデンに飛ぶ」と言うので「1時間だね」と言うので「何で分かれるとね」と言ったら、「**世界地図を胸に描いている**。」と言った。また、国際オンブズマン会議で「**あなたは、わたしの最後の希望です**。」と言われるような「ウクライナのニーナさんが、自国での活動に感動した。」と言うと、ウクライナの産物や鉱物や歴史を話すではないですか。英文科を受験するのも当たり前、英語も私はかないませんでした。

また、**南米ペルーのクスコ（インカ帝国時の首都）**から電話入れたら、すぐに「腹はこわしとらんね。」と聞くので、クスコは標高3400mの町なので高山病にかかっており、「何で分かれるとね」と言うので、「**私もこわしているから**」と、そして「**1年も私の腹ん中にかごんどったけんたい**。」と言うのです。

財布を持っていないとお金を扱ったこともありませんが、家族生活の方針は全て母が決めていました。14歳から今まで80年間、ずっと家族の食事を作ってきています。スカートをはいた母を見たことはありません。時折、「**男に生まれれば良かった**」と言っていました。皆さんはどう思いますか。同じように仕事して、どんなに遅くなくても急いで夕食を作らないといけ



★ちぎり絵（粹子作）
・干支は新年に友人知人に送っていました。

南米の風景／スイスの風景／干支



70年前の島腹鉄道 有家驛

南有馬吉川に里帰りするときの風景。何度も有家から吉川まで私を抱いて線路を歩いて帰っていた。一番鉄橋が恐かったと。着いたら祖父は、今頃汽車はないはずだが、母は、**友だちと会ったので話し込んでいた**と答えた。「お母さんたち皆元気でられるか、帰るのか泊まるのか」と聞く。泊まると言ったら仕事を続けて、帰ると言ったら、手伝人に肉やら魚を買わせた。

ない。男は、風呂に入って相撲やプロ野球などを見ながら晩酌、女性はつまみも作らないといけない時代だった。そうそう、暗い炊事場で時々ドーナツ風のものを作ってくれました。小麦粉を平らにして湯飲みの飲む方で押さえて切って、湯飲みのお尻で、真中に穴を開けていました。

転職するとき、採用試験で簿記だけが零点でダメだったが、母は、もう一度受けるように言ってきた。島原市から加津佐町にある高校の簿記の担当の先生に「**息子が簿記を勉強するので、使っていない教材を譲って欲しい。**」と突然訪問して告げても相手にされないのも当たり前です。どうかしたい母は、意を決して「**怪しい者ではありません。兄は豊増大吉郎で教育界でお世話に成っています。**」と告げると、持ちきれないほど頂いた。何本かつくらにウイスキーを忍ばせていたそうです。何校も回っているのに、大きな段ボールで送ってきました。

◆母の趣味◆①ひょうたんの栽培と加工（有馬愛瓢会の発起人の駐在さんと共にの当初の会員で女性は珍しかった。（栽培から加工まで、大きさと長さにこだわっていた。）、

②ちぎり絵（長門先生宅での集まりに参加、干支を作成して毎年、友人知人にプレゼントしていた。）、

③ジャンボにんにく栽培（35年間栽培：1株4個～6個ほど玉が入っており1株で3～4千円）、
何で売らんとね、とよく言われる。35年間販売してきたら、いくらになったことでしょう。

④中国歴史小説（女学校時代に読んだ三国志などに興味があった。）、

⑤習字（眞智子先生の指導を受けていた。段持ち）、⑥テレビでは世界旅行など見るのが好きでした。

ニンニクでは毎年新聞に取り上げられ、ひょうたんは、慶事・受験（合格）・楽器での依頼があった。

2017年（平成29年）6月28日（水曜日）（2）

第25286号（日刊）

7月3日（月）友引
（旧暦閏5月10日）

総合案内 0955844
報道部 0955844
編集部 0955844

発行所

南島原市有家町
の畑で、重さ約
1.5キロのジャ
ンボニンニク
写真左が取れた。収穫し
た木村ス井コさん（93）は
「長年生きていて初めて」と
喜ぶ。

その大きさに目を丸くした。
〇：1989年当時営ん
でいた製麺業の傍ら、自身
や家族の健康のために栽培
を始めた。普段は数百個の
ものが取れる。地表に見え
ていた葉の大きさから予想
はしていたが、6月初旬に
いざ掘り出すと「まさかこ
こまで」とは……。

〇：あえて味見はしない
という。中身の8粒を全て
植え、「こんな特大サイズ
を来年ももっと多く収穫し
てから食べる」。さらなる健
康増進に向け計画的だ。
（板倉聖教）

15日など5個を収穫

有家の木村ス井コさん

1.5キロのニンニクを自宅の畑で収穫した木村ス井コさん（93）さん。

◆豊増宮市（母の父で私の祖父）

明治15（1882年）年3月16日に南有馬吉川に生まれ、南有馬尋常小学校を4年行き、まぼろしの第七高等小学校（有家町下町の十八銀行の社宅の場所）に2年通った。毎日、弁当を2個と、わら草履を2足を風呂敷に入れて通った。原城入口にあった川口石油さんがあった場所が一番怖かったらしい。幼い子に長い道のりを通わせ勉強させた曾祖母がいたからこそです。教育となれば女性が活躍する家系です。明治26年に口之津・加津佐・南有馬三ヶ村連合高等小学校が口之津に開設されたので移り、殿様路を歩き山を越え、途中で看護石があったので、いつもそこで休んでいたという。近くに神社があり奉納相撲があっており、あずきの入った餅をとっかに包んでもらったと、母は聴いている。

北村西望さんの兄の北村総族さんが村長の時の前後に助役をしている。家に役場の人が書類を持ってきて「すけやく」さんいますかと聞くので祖母は「じょやくですよ」とかえしていた。

初代の市衛門が作った曲堤（かねんとつつみ）が20日で枯れるので自費で掘り下げ、その土は埋め立てに利用して田畑（吉川の墓のあたり）の耕作面積を広げた。並行して白木野の堤も自費で掘り下げている。

又、吉川みかんは、伊木力みかんの中野たえもんさんと共同にて研究開発した。中野さんは、技師を含め6名ほどの雇い、当時でも保管する地下室があったという。滞在中は、身の回りの世話は、女中さんがしてくれた。南からの潮風を受けて段々畑にマッチした吉川みかんを開発した。島原半島の大半は、祖父（宮市）が栽培した株分けであり、県内外からも要望があったので分けてやっていた。

当時は食べるものも少なく、まして蜜柑も珍しかったので地域の老人を敬うことを優先に、出荷する前に、60歳以上の老人に毎年「蜜柑」を配っていた。蜜柑をはじめ農業全般に詳しく、ラジオで毎月と季節ごとに「輪作体系」を放送していた。土地が、1年中、有効利用できるように考えての指導で、自ら

の研究を生出演で行なっていた。

また、**将来、酪農の必要性**を考えた祖父は、自費で宇野より乳牛を仕入、浦田の駅の前に牛乳とバター工場を建てた。人造バターではなく本物志向を消費者が求めて来ると考え、真生バターにこだわった。初めは協力企業が森永であったが、途中より明治乳業に変わっている。母が大きく成るまでであったという。長浜（浦上病院の下）では自殺者や切腹する者が多かったので、見張り番をおいていた。だが、夜は恐いので誰もいなくなるので、宮市自身が夜には見張りについていた。行き倒れが多かったので、それを聞くと「握り飯」を持たせて走らせた。

又、柳川より、**あさり貝を3隻の船**に積み込み、干満の差が特に大きい北岡の浜で養殖し缶詰工場を建てようとしたが、昼間は見張り番で防げるが、月夜の晩に掘られることに気づかなく取られてしまった。生前、父に「**こんなに多く事業をしてきて失敗したことはないのか。**」と聞いたとき、**唯一の失敗**として話してくれたと母は言った。

原城の松などの木々の剪定や除草作業のため庭師や作業員を5～6人雇って定期的に自費で行っていた。幹旋所は大江や吉川駅の前にあったらしい。また、**原城の蘇鉄**が耐えないように株分けして有家の寺、深江、島原など島原半島の至る所に植えている。全部枯れたので、今の原城の蘇鉄は株分けておいたものです。

多くの親からの相談を受け、若者が定職持って長く働くようにと、**有家の野原金物店より「縄編み機」**を数台購入して製造するようにした。縄は売れに売れたので、喜ばれて機械を追加購入している。

母が、有家に嫁いで、「**有家ではサツマイモをはちりと呼ばれており、栗より1里少なく、栗よりおいしくないから。**」と話す、祖父は「戦時中、命を繋いだ作物である。そのように言うものではない。」と諭されたらしいです。**初代「市衛門」の命日と祖父の生誕月日が同じなので、生まれ変わりと信じて精進し、原城跡を常に気にとめ、周りの人の為にと尽力した生涯であった。**

私が生まれるとき、当時は自宅で出産し、産婆さんにお世話に成るのが普通でした。何人かが来られて「お嬢さんの産前産後の1ヶ月、こどもの湯浴びなど全部して千円でいいです。」とあったらしいです。祖父は、祖母が亡くなり世話する母親がいないので、地域で出産した奥さんたちに準備するものなど聞いて回っている。**出産には哲翁病院**を用意してあった。朝昼晩の食事と母と私の世話をしてくれる人を雇ってくれていた。毎朝、乳がでるようにと早崎の魚（特にあらかぶ）を買って味噌汁で食べた。退院が近くなったので、使いの者が料金を聞いて驚いたそうです。帰って祖父に恐る恐る金額を伝えたところ、黙って渡された。母は後日、出産費用は18,000円と次兄から聞いた。

◆父（宮市）の交友関係（本多大臣・尾崎大臣）

本多一郎氏（第50代：第3次吉田茂内閣の行政管理長官）北岡の干拓

本多氏は、外遊した時、ラクダに並んで乗っている写真を持ってきた。もう一人は、尾崎尊堂氏（尾崎行雄、1857年、安政5年生まれ、福沢諭吉や大隈重信との出会い、文部大臣、東京市長、司法大臣、天皇陛下の相談役とも言われ東京都名誉都民第1号）であった。

◆**祖母（母の母）** 明治21年生まれの祖母（ス井コさんの母）は、龍石の本多家より嫁いできた。西有家尋常小学校を卒業しており、残っている卒業証書に校長が内藤政策氏とあるので、**第七高等小学校の校長と兼ねていた**と思われる。

◆**幼い頃の思い出** 吉川駅を降り、線路を口之津方向に歩き踏切を右折すると、**大きな曲堤（かねんとつつみ）**が左に在る。登って行くと右に家が見え、さらに登ると**大きな池**が右にある。大きな鯉（有家の庄屋さんが定期的に購入）が泳ぎ、殿様蛙が飛び回っていた。そこから先は、60度くらいの坂で、竹の根っこが至る所に出ているので、それらをつかんで登る。雨の後などで湿っていればよく滑った。戦前は、祖父のところには有家をはじめほうぼうの方が年貢米の徴収のついでに寄られていた。

左が牛舎で、真ん中に風呂と便所の棟、右が母屋だった。母屋の裏は竹林に成っており、崖を下る前に、**ねむの木や皮の薄い平戸ボンタンの木**があった。たわわに実っており、美味しくてたくさん食べた記憶がある。豊増家の墓は吉川の海を望む所に代々の墓があり母は18代目と成る。

◆幻の第七高等小学校の秘話

明治19年に発足し、45年に突然消えた謎の多い学校で、わかる資料も残っていない。偶然に有家町の郷土誌を母（ス井コ）に見せたところ、卒業証書に目がゆき、以下母のお話し。

有家町下町で十八銀行があった場所で、尋常小学校を卒業して行く学校で4年間だった。**教職員の再教育**も兼ねていた。明治32年5月の卒業証書で、**第七高等小学校 校長 内藤政策**とある。内藤政策氏は、兄、豊増大吉郎（筆者の伯父）の妻の父であり島原藩の武家で代々指南役。丹崎家と谷崎家の2家を継いでいる。**伯母は内藤家の一人娘**で、結婚の時は、武家では養子をとる必要があったので、母を

希望された。だが、刀剣や甲冑をはじめ財産目当だと思われるので、兄（伯父）が断り奥平家の3歳児が養子に成っている。伯父の結婚式は、**島原の米屋旅館**で行われ、高齢の方が階段できつそうにされていたので、母が手を貸そうとしたら、「**結構でござる。**」と武士語で返された。

◆豊増大吉郎（母の兄・伯父）

あまりにも成績が良かったので、こんな田舎におくのはもったいないと、子どもがいない福岡の親戚（英語教師）が預かり、福岡の中学校から広島高等師範学校（現在の広島大学）に進学した。漢文で身を立てようと努力していたが、病気で叶わなかった。突然、漢詩屏風をだされても即座に読み解説していた。**戦争では文書解読や通訳で重宝がられたらしい。**旧制島原中学校（現在の島原高校）に勤務し、県内高校の校長を歴任して退職した。体が弱かったので、休みがちだったらしいです。

その後は、**島原中央高等学校の校長に就任**している。この高校がボランティアや地域活動を取り入れたのは、豊増校長に成ってからで、**心のきれいで素直な子が多いといつも言っていた。**私が教師として誘われたのが、この頃である。地元に戻ってきて伯父から「双美塾」と「T G C（豊増ゴルフクラブ）」の集いがあるので、参加してはどうかとあった。伯父の教え子中心で、年齢が離れているので、迷惑をかけると遠慮していると、「お前も島原高校を出ているのでよかと。言っておくから」とあったので、T G Cに参加するようにした。合同慰労会や忘年会などは、島原保養センターで開催された。

長女 仁美が生まれたとき命名の書をお願いしたとき、伯父は書きながら**「梅の種を割ると白い実がある。それを仁（ジン）と言って、固い殻を破って芽を出す姿こそ美しいのだ。仁美と、よき名前を付けた。これからの女性はこうあるべきだ。」**と話してくれた。母は、兄（伯父）とは15歳違うので、時々家にくるおじさんは誰だろうと思っていた。網で取ったものではなく一本釣りの魚を使用人にわざわざ買わせていた。時代は昭和6年頃であるが、兄の給料は百円と母は記憶している。

2. 島原手延そうめん

次に麺（メン）が支えてくれた。このような状況では大学を退学させないといけなかったと考えた両親は、島原手延そうめんを製造することにした。昭和46年です。休みには帰ってきて製造の手伝いをした。粉や塩やデンプンや小麦粉はじめ製造工程などを写真に撮りながら勉強しました。小麦粉、塩、デンプン、むらしなどの製造方法工程を聴き取った。これらが後に、むらおこし、わざおこし、まちおこし事業に活かされた。**麺と出会って2023年で52年目**になります。多くの方に支えていただきました、麺博士が開発した、「**ハイブリット輪状二層めん**」を一級製麺技能士たちの助言のもと加工して、**ローマ教皇・ヨハネパウロ2世に献上**しました。さらにスペインのセビリヤの大聖堂に献上し、セビリヤ市役所の市長に謹呈しました。多くの人の力をお借りして即席麺・未来麺・機能麺を開発して、**日本では珍しい**「むらおこし・わざおこし・まちおこしの」3つの「おこし」に取り組んできました。

3. 即席麺・未来食

即席カップ冷やし手延そうめんを開発して沖縄の物産展で発表しました。次に全国の賞や県知事賞をはじめ多くの賞を受賞したので池袋サンシャイン60のコンベンションホールにて発表しました。そこのお客さんは、あったか麺の方が旨いとのことで、売れに売れて対応できなくて主催者スタッフも大勢協力してくれました。長崎県にもご協力いただき、長崎から県議が多く来場されて、一緒写真におさまりました。多くの補助金をいただき、「有家そうめん」として、**島原そうめんの普及拡大の広告塔としての位置を確立するに至りました。**

◆長寿食の日本での第一人者の永山久夫先生

夫婦で池袋の会場に来られ親しくなりました。当地で講演会を実施したとき私の両親も会っています。永山先生に、そうめんに混ぜる長寿食材にコーカサス地方の乳酸菌（ヨーグルト）はどうですかと言うと、動物性なのでお薦めできない。韓国キムチは植物性乳酸菌なのでいいと言われた。また、**これからスーパーフードがブームに成る**から南米ペルーはどうだろうかと思ったので、すぐに出かけた。高山病と闘いながら、**スーパーキヌア・アマランサス・キャットクロー・ウルトラマカ**など持ち帰って、そうめんに入れて、試作を繰り返した。**（言われるとおり何年か後にブームになり最近もブームである。）**

人気商品になったので、公的機関で利益を出してはよくないので、別会社を作った。10年間公的機関の中に販売会社が存続することになった。諸先輩や同僚が異動するなか、私だけは異動しなかった。テレビ（長崎県・熊本県・福岡県・東京都のテレビなど）、新聞（島原新聞・長崎新聞をはじめ全新聞社）、ラジオ（長崎県・熊本県など）、雑誌（るるぶ・週間朝日・読売旅行など）多くのマスコミに取材していただきました。東京ビックサイトで3日間に20万人来場する世界の物産典に出展していた時、総合商社との商談やノウハウを譲渡などありましたが全てお断りした。**これは、島原手延そうめんの販路拡大の広告塔の役目を担っているからです。**全く同じの商品を作り、企業力で販売拡大して大手航空

会社のショッピング雑誌に記載されています。飛行機に乗ったら見てください。大手企業がまねしたくなるような、素晴らしく体にやさしい商品と言うことです。麺のお陰で、多くの人と出会い相談活動に生きてきました。父と母は、献上品の線香巻き、包装の手伝い、ラベルのデザインと高齢者が好むFD加工度合い、麺の太さ、堅さ、風味（あごだし）、加薬（具材）などを変えての試食テストに進んで協力してくれました。結果的には「母のためにと作った即席長寿麺」だったのかも知れません。

4. パソコン

昭和56年よりNECのワープロ、次にNECのPC-98との出会いがあった。パソコンと出会って、2023年で42年目と成ります。若い人の相談が少ないので、気軽に相談出来るようネット（パソコンとスマホのWEBサイト用）での相談を受付けてきました。地域の実情に沿って、そして暮らしている方々を思い描き、さらに声に出せない声をキャッチできるようにと、取り組んで参りました。

このように、当地は島原手延そうめんの産地で、仕事が済まれてでも相談出来るように相談会を夜に開催してきました。日本で情報技術（IT）化が叫ばれるだいぶ前での先駆的な取り組みであったが、こんなに大きな成果を持ち込んでくれるとは思いませんでした。

ホームページの発信数は、相当の数になります。ネットは世界と繋がっているのも、早くより情報収集などに利用してきて、人生のいろんな場面に活かしたので他の人より恵まれてきたと思っています。

ネット（メール）やLINE相談も文字でのやりとりです。これは好きな時間に自由に書けるメリットがあり、声に出せない声を聴くことが出来ます。いろんな場面でアンケートをお願いしています。

アンケートには、①講演内容の評価（要望意見・苦情など）②実施者の意図する結果に誘導、事前想定結果の確認③声なき声を聴き、みんなと繋がるなどの目的効果があります。記入は自由で負担を与えない、何でも書ける自由意見欄で明日の声が見えたりする。しかも手軽に用意でき素晴らしいツールです。

早くよりパソコンに出会っていましたが独学でした。3～5年ごとに1ヶ月から1ヶ月半ほど東京の中小企業大学に入校して次代に沿った経営全般の講義を受けます。パソコン操作、ネット及びソフト活用の実践を学ぶことが出来ました。最終の何日間は、これからの成長する分野の起業化プレゼンコンテストがありました。全国から集まった社会人学生が予選・決戦と進めて行きます。退職まで5～6回入校しましたが、コンテスト毎に最優秀賞を受賞し、副賞に学長賞をいただきました。パワーポイントでのプレゼンは、今に生きています。仕事を離れて入校することは、自分を見つめ直し、これからの人生を考える時間でもありました。

5. オンブズマン

日本オンブズマン学会に加入。オンブズマン制度は、1809年にスウェーデンで創設された。国際オンブズマン研究所主催の国際会議を、200周年になる2009年にスウェーデンで開催され招待を受けて出席しました。全てはメール（英語）でのやりとりでしたが、形容詞など不必要な言葉は抜き、単語の列記ですむのはそうしました。毎年実施する中学生のイタリアのホームステイも世界共通の言葉の「ジェスチャー」が活躍します。日本人は逃げるが、外国では大半の人が日本語を話せると答えます。

4日間の会議で、会議後の会食のドレスコードがありました。3日間はカジュアルでよかったが、4日目の晩餐会はフォーマル（正装）〇〇以上と指定がありました。1日目は博物館に案内され入口でワインが渡された。ワゴンにはワインや飲み物や料理が並べられ至る所ですすめられるたびに、これが夕食かと食べていた。午後9時頃に高級レストランに案内されフルコースを午前1時まででした。普段食べられない高級な料理が目前にあるのに食べられない思い出です。日本から総務省と学会理事長兼大学教授と私が出席しました。二人は、研究者なのでプロフェッサーとして、私は活動しているのでオンブズマンとして登録しました。スウェーデン議会主催でカール16世グスタフ国王王妃ご臨席のもと、ストックホルム市庁舎のブルーホール（青の間）での晩餐会では、総務省と教授は30番テーブルで、私は4番テーブルでした。これは、オンブズマンとして世界的に認められた最初ではないでしょうか。



◆次に木村家のお話です。木村家は2代にわたり戸主が30代で若くして亡くなったので、父（俊晴）は、家族を守るために尋常小学校をやめて家業の農業に従事している。おのずと田畑も少なく苦しい生活であった。わたしは、農家の長男として生まれたので、後を継ぐものと父はじめ誰もが思っていた。

友だちと遊びたいのに、小学生になったばかりでも農作業に連れて行かれてた。農作業が嫌で嫌で、どうしたらなくてよいのかを考えて料理をするようにした。小学校2年生になると、料理はまともに出来ないが祖母がいたので「母ちゃん、夕ご飯のしたくで先に帰ってよかね」と言って先に帰った。現在に至っても料理することは苦にならない。工夫が必要なので、採用時に料理するの



島原新聞

発行所 島原新聞社
〒855-0044 島原市中町865番地
代表 0957(62)5141
編集 0957(62)5143
FAX 0957(62)5142
E-mail press@shimabara.jp
郵便番号 855-0044
創刊 明治32年8月25日

●仲買人が買い付けに来た時、**チキリ**の先の荷を突き刺す金具の先で、玉子を突つつき、穴より2〜3個すすってから商談に入った。傷ついた玉子も多くお菓子屋さんが引き取った。**あれだけ玉子を食べてきたのに母は飽きていない。**

また、柳川から貝を3隻に積み込み、干満の差が特に大きい北岡の浜で養殖し、詰詰め工場を建てようとしたが、昼間は見張り番で防げるものの、月夜の晩に掘られることに気づかず盗まれてしまった。生前、父に「こんなに多く取り組んで失敗したことは

たので見張りの番をさせていたが、夜には誰もいなくなるので宮村自身が見張りについていた。行き倒れが多いので、それを聞くと「掘り飯」を持って走った。

また、柳川から貝を3隻に積み込み、干満の差が特に大きい北岡の浜で養殖し、詰詰め工場を建てようとしたが、昼間は見張り番で防げるものの、月夜の晩に掘られることに気づかず盗られてしまった。生前、父に「こんなに多く取り組んで失敗したことは



寄稿
総務省委嘱行政相談員 九州7県会 母・ス井コノ生家である豊増家のことに少しふれると、豊増家は寛永14(1637)年に勃発した島原・大卒一揆の際、母方の先命により佐賀の鍋島藩の豪族にたつ豊増市衛門が南有馬へ移住してきたのが初代である。水飢饉が続くなか、地域住民が安心して稲作ができるよう自費で曲堤(かねんどう)をつくったので、堤防に由来して「ていばいさん」と呼ばれていた。

母の父・宮市は20代目になる。明治15(1882)年3月16日に南有馬吉川に生まれ、南有馬尋常小学校に4年通学し、まぼろしの第七高等小学校(有家町下町の十八銀行杜宅)に2年通学。毎日わら草履をひとつ履き敷き入れ通ったらしい。原城入口の川口石油さんがあった場所が一番怖かったらしい。3年目に口加高等小学校へ移り、殿様路を歩いて山を越え、途中で看護士があり、そこでいつ

族にたつ豊増市衛門が南有馬へ移住してきたのが初代である。水飢饉が続くなか、地域住民が安心して稲作ができるよう自費で曲堤(かねんどう)をつくったので、堤防に由来して「ていばいさん」と呼ばれていた。

も休んでいたという。初代がつくった曲堤が20日で枯れるので掘り下げ、その土は埋め立てに利用して田畑(吉川の墓のあたりの耕作面積を広げた。並行して白木

はい、こちらは
くらしの相談所の
木村と申します。

南島原くらしの総合相談所長 木村 優仁
(南島原市有家町)

野の堤も掘り下げている。また、吉川みかんは、伊木力みかんの中野たえみさんと共同で研究開発した。中野さんは技師を含め6人ほど雇い、当時でも保管する地下室

半島の大半は宮市が栽培した株分けであり、県内外からも要望があったので分けてやっていた。

当時は食べるものが少なく、ましてや蜜柑は珍しかった。

半島の大半は宮市が栽培した株分けであり、県内外からも要望があったので分けてやっていた。

当時は食べるものが少なく、ましてや蜜柑は珍しかった。

があつたという。潜在中、身が回りの世話は、女中がしてくれたい。宮市は、蜜柑(みかん)をはじめ農業全般に詳しく、吉川みかんを最初に植え、島原

たので、地域の老人を敬うことを優先し、出荷する前にまず60歳以上の老人に毎年、蜜柑を配っていた。

ラジオで毎月季節ごとの「輪作体系」を放送していた。土地が1年中、有効利用できるように考えての指導で、白の将来を演出で伝えていた。将来、酪農の必要性を考えた宮市は、自費で宇野より乳牛を仕入れ、浦田の駅前に牛乳とバター工場を建てた。人造バターではなく本物志向の消費者が求めていると考え、真正バターにこだわった。はじめは協力企業が森永であったが、途中で明治乳業に変わった。母が大きなきになるまでであったという。

長浜(浦上病院の下)では自殺者や切腹する者が多かった。

高校の校長になった。次男は県庁勤務、長女は教師になった。母は、長男とは16歳違つたので、「ときどき家にくるお兄さんは誰だろう」と不思議に思っていた。網でとった魚ではなく一本釣りの魚を使用人にわざわざ買わせていたらしい。時代は昭和5年ころであるが、兄の給料は100円だった。と当時6歳の母は記憶している。(不定期掲載)

か聞けば参考に成るのでは。授業参観や学校の集会には**祖母**が来ていた。**私が「友だちの母ちゃんは口(唇)に赤いのを付けて来るのに、なして母ちゃんは一回来んとね。」**と言ったらしい。

祖母はよく私を連れて外出した。しゃべれなくても「あっあっ」とお辞儀するし、しゃべり出すと、思いがけないことを言うので、まわりから可愛がれたそうです。小川の町営住宅が十戸建てられている時、一戸一戸見てまわって「**どれにしようか。**」と言っていたそうです。



就職しての初任給で祖母に**茶器セット**(写真: 現在も保存)を送った。**祖母も思いがけないことで喜んだが、母が一番喜んでくれた。**祖母の葬式後、母は、我々は喪に服するが、お前の気持ちはわかるが、東京に着いたら、まず、いい肉や魚を食べなさい。と言って送り出した。

中学校卒業前に料理店住み込みか調理学校に行かせてほしいと言ったら、「**高校は出んば**」と言われた。すぐ母は担任に会って、何処を受験できるか聞いて帰って来るなり、この高校を受けなさいと言った。受験勉強もしていない上、家にはお金がない。島原までの汽車の定期券と月謝の支払いなど不安があった。父は母の決めたことには賛成してくれた。高校3年間は授業は休まず真面目に

受けたが、定期的にある試験など一切勉強しないし、する必要はないと思っていた。当然に、「木村、月謝はまだね。」と度々催促された。卒業近くなると進学担当の教師からリクルート雑誌をもらって、めくっていると産経新聞を配達して夜間大学に行って、何年か後に昼間に移行する内容があったので、進学担当教諭に相談した。教諭からすぐに母に連絡がいき、進路希望内容が伝わった。

母は、わたしを呼んで「大学に行きたいのか。」と聞くので、「行きたい」と答えた。「お前は受験勉強はしとらんじゃろ、もう受験できる大学はない。浪人はさせられない。母は、進学の先生と相談して決めるので、決めたところを受験しなさい。」と言った。二次募集があれば連絡しますと言われたらしい。「母ちゃん、大学なら何処でもよかとね。」と聞くと、「大学は、人間形成の場であり、行くお前次第だ。」と言った。上の学校に行けなかった母の青春の苦い思いをわたしに託したかも知れません。月に5千円しか送ってくれないので、4年間寮生活で家庭教師などのアルバイトばかりの生活でした。だが、授業は休まないようにしていた。それは、お金がないのに生活を切り詰め辛抱して、5千円送ることがやっとのことの両親を思うと授業を休めなかったからです。

大学の休みに帰省して手延そうめん製造を手伝った後、毎日、通りに面した部屋で、ギターをたたき大声で歌っていた。母は近所迷になるのでやめて欲しいと歌うたびに言った。次第に「これは青春、はやめてくれんね。」と言うようになった。

父は生涯6軒、家や工場を建てている。お前は1軒も家を建てないで私たちの家を自分の家のように自由に使っている。1軒くらい家を建ててみると機会ごとに母は言っていた。8部屋の内5部屋と80坪の工場の半分をパソコン機器、行政相談関係資料、人権相談関係資料、ポスター、チラシ、賞状額30個、海外から持ち帰った資料やインカ塩やお面や石などの置き部屋にしているためでしょうか。

人生2回転職した。高校や役場の話もあった。アグネスラム・蓮舫・かとうれいこ・烏丸せつこなどのクラリオンガールで有名なクラリオン株式会社に興味を持ち、いつもの通り履歴書と志望動機を綴った文書を入れて送った。一次が通って面接の時、当社を選んだ理由はと聞かれ「食うため」とこたえて採用された。文字の威力を痛感し、益々興味を持ち、さらに磨きをかけていこうと思うように成った。

●庭の花や木々の全てス井コさんが植えました。

巨大ねむの木とピンクの花		ねむの木の種 子どもも2本育 っています。	ツバメの夫婦の 巣作り すずめも訪れます
ねむの木に巣を作る啄木鳥（キツツキ）		梅の実／左が長女・右が次女の梅の木	
シュロ	白木蘭	柊（ひいらぎ）	祝賀会／中小企業大学でのプレゼン
他には（ほかには）カラーリリー・柊・モチノキ・桜・沈丁花・オオデマリ・柿・ふじ・月桂樹・榊・ローリエ・台湾椿・金柑・ゆず・金木犀・サザンカ・花芝・檜・樫・南天・ユズリハ・ツゲ・アジサイ・ねこやなぎ			

2019年（平成31年）1月3日（木曜日）

購読料一月1,300円 第三種郵便物認可・鳥取県道特別取扱承認第一号

記憶力が抜群で達者

鳥取県鳥取市有家町の木村ス井コさん（93）は昔のことをよく覚えていて記憶力が抜群で達者だ。大正時代末に生まれ、昭和、平成と三つの元日にわたって「世紀」迫る年月を過ごしてきた。「あらゆるものへの感謝と愛行を忘れずに暮らしたい」と新年の抱負を語る。



読書に勤しむ木村さん

南鳥取町の豊増宮市さん、来の表記は「ス井コ」だった。門が南鳥取町へ移住したのが、ス井さん夫婦の間に4人きょうだい、という。豊増家は佐田・鍋島藩の家。ス井さんは豊増家20代目にあたるス井コさん。豊増（ひすい）族で、鳥取・大正一侯（16）り、先駆的にミカン栽培や牛の「聖」が名前の由来で、本（37〜38年）後、初代市右衛門、乳・バター工場を始めるな

有家町 93歳の木村ス井コさん



ど、経営に長けていた。規模も大きく多くの人を雇っておりました。ス井コさんは幼い頃、従軍から「お嬢さん」と呼ばれ、日ごから白米を口にすることが難しかった生活を送っていた。

ス井コさんは80歳で木村家に嫁ぎ、3人の子どもに恵まれ、孫3人、ひ孫も1人。夫の豊増さんは3年前、93歳で天寿を全うした。結婚後、夫は建設会社に勤める一方、ス井コさんは9反（約1千平方メートル）の田畑で、一人でミカンとコマの栽培に汗を流す日々を送っていた。



かつて趣味でひょうたんを栽培し、加工もしていた。

農業や製麺業を経験

今も何でも自分でやる

ミカン農家から1971年、た1989年、家族の健康をに手延べ、そうめん製造業に転向。考えてジャンボニンニクの栽培を始め、30年。この間、趣味的にひょうたんを栽培して加工もしていた。

「感謝と愛行を忘れずに」

工し、有馬愛蔵会の一員として活動したこともあり、自宅倉庫には公開していないが、今なお多くの作品が残る。

神武天皇など歴代天皇125代をすべて読まらねば、おそろし、80年ほど前の幼い頃に学んだであろう漢文の「節」もすらすらと暗唱する。テレビ番組で外国の話題になると、この国の産物は「な」など地理や歴史にも詳しい。毎朝、新聞を熟読し、週に1〜2冊は本を読み、「読後に頭の中で内容を反すうする」ことが脳の活性化につながっているのかも。

食事は30回ばかり、毎年漬ける梅とラッキョウを毎日口に。何とも自分でやり、週一回アイサーピスに通うなど外に出て人とふれあう「ことも大切に、一好奇心旺盛で楽し（過）す」。『あらゆるものへの感謝と愛行を忘れずに』と新年の抱負を語り、「支えてくれる地域のために尽くす」と愛行を込めた行動を忘れずに生きていきたい」とほほえんだ。

			
母とニンニク風景	収穫直後の風景：大きいのは2kgを超える		にんにくの花
			
超巨大ひょうたん	1株に4～6個（4個は1個で800円：6個は1個600円）1株3～4千円		
			
合格祈願の瓢箪と花瓢箪	瓢箪展示風景・長寿食材求めている旅で出会った珍品（国内・国外）		
			
長崎ひょうたん栽培研究所	栽培風景・2mを超える	手前の4作品が母の作品	長瓢箪2mを超える
			
受賞トロフィー	左の巨大ひょうたんが母の作品		六瓢（無病息災）
			
			黒と金箔

天正遣欧少年使節団の足跡を辿る旅、ローマ法王に謁見			北欧南欧の風に吹かれて	
				
●南欧紀行（上） ・ポルトガル	●南欧紀行（中） ・イタリア	●南欧紀行（下） ・ヴァチカン	●北欧紀行 ・スウェーデン	●南米紀行 ・ペルー
				
●オンブズマン ・スウェーデン	●にんにく：ジャン ボ・エレファント	●ひょうたん ・長崎瓢箪栽培研究所	●各種めん	●メロディー詩作
				
●プロフィール	●ルーツ	●人生の道草	●ベンリングノート	●LINE（ライン）
♥勇気を持って♥ 人間はもとより万能ではなく間違いをよく犯します。また、人間が作る組織も社会の制度も完全ではありません。まず、自分が出来ないことは、出来る人に頼る勇気、そして、自分が出来ることで周りの人が困っていたら、助けながら生きて行くような暮らしやすく、生きやすい社会にしてゆくことです。あなたも、そのひとりに。 ♥ 勇気も持て たよる勇気と 聴く勇気 ♥ ★私は、家庭の事情で進学出来ないことを分かっていたので勉強を疎かにしてきたが、通学させてもらっているので授業は休まなくノートだけは取っていました。その癖は今もあって、枕元、トイレ、自動車、各部屋にメモ用紙と筆記用具を置いています。身を守るために持ち歩くバッグ等には、メモ帳・折りたたみ傘・タオル・ペンライト・カメラ・スマホ・マスク・虫眼鏡・タブレット、休日は安全靴と帽子、リュックには、軍手・レジ袋を追加します。カメラが買えるようになったら、記録用にと可能な限り撮るようにしました。そのメモや画像が多くの分野で生きてきました。				
  ★母は、大好きなクローバーを見つけると近寄って四つ葉を探します。幼い頃、本のしおりとして挟んだ思い出でしょう。原城跡に続く道路沿いにはクローバーが沢山あったので、学校前の娘ふたりと探したものです。1日で四つ葉50本、五つ葉3本、六つ葉1本見つけて、「押し葉」にして保存しています。（30年前）。クローバーは、麦と同じで踏まれるほど四つ葉が発生するそうです。（左が五つ葉・右が四つ葉）				
●曾祖母・祖母・母と女性が代々、先見の明があったのでしょうか。そして母（ス井コ）は木村家に導びかれ木村家を繋いでくれました。私の人生の至る所で選択・決定・実行に関わりながら支えてくれました。何度も危機を脱し生きてこられたのも父と母のお陰と感謝しかありません。深江より南有馬の1万世帯で木村は1軒で、本村とよく呼ばれました。独立して木村家を出行って木村の姓を繋いだ人はいません。 ★あとがき★ 本冊子は、母が登場した私の活動内容の記録と縁側で日なたぼっこしながら話してくれた母の記憶に基づき纏めたものです。時代背景、名称など思い違いがあるかも知れません。また、誤字や脱字、方言（ありえ弁）など不明瞭な点があってもご想像くださり、その節はご了承ください。 ●父 木村俊晴は、母に支えられ大正・昭和・平成を生き平成28年7月26日で92歳11ヶ月の生涯で、母 木村ス井コは、大正・昭和・平成・令和と生き令和5年2月13日で97歳6ヶ月の生涯でした。生前に賜りましたご厚情に心より感謝申し上げます。				
★発行人 〒859-2205 長崎県南島原市有家町小川34番地2 木村 優仁 Mail : arie@andes-wind.com URL : http://www.andes-wind.com 電話& FAX 0957-82-5923 携帯☎ 090-1362-0138				